序

京都市東山区の五条坂は今も陶磁器生産が盛んです。五条坂には昭和40年代まで使用されていた登り窯が今も残り、煙突が往時の面影をかいま見せてくれます。

本書は「京焼と登り窯」をめぐる様々なことがらを多面的に検討したものです。次の９つの視点で調査した成果を紹介します。

①陶土の問題、②歴史的な問題、③京料理との関係、④五条坂の移り変わり、⑤考古学的調査、⑥職人さん（陶工・窯焚き）の想い、⑦化学陶器の生産、⑧備前焼との比較、⑨登り窯を活用する試み。

今もやきものの町として生きている五条坂を中心にして「京焼の現在・過去・未来」について考えるきっかけになれば幸いです。

また、京都は伝統産業の宝庫であり、大学にとっては研究と教育のためのかけがえのないフィールドです。この調査はその利点を生かし、研究と教育を兼ねたフィールドワークの可能性を確かめる試みでもあります。

文学部教授　木立雅朗

五条坂に残る煙突（公害防止のためにつけられた煙突）

例言

１．本書は立命館大学21世紀COE「京都アート・エンタテイメント創成研究」近世京都手工業生産プロジェクトの調査成果をまとめたものである。

２．本書に関わる調査は、文学部教授木立雅朗・専任講師田中聡の指導のもと、立命館大学文学部テーマリサーチゼミLP（京都の土と社会ゼミ）、および考古学演習Z6（歴史考古学ゼミ）の学生・院生・卒業生が行った。本書の執筆は各ゼミの学生・院生が行い、木立が編集した。

３．調査にあたっては多くの方々のご協力とご理解を頂いた。各節もしくは各章の文末にご芳名を記したが、氏名の公表を控えてほしいと要望された方々もいらっしゃる。そうした方々も含めて調査にご協力くださった多くの方々にお礼申し上げる。